

# ゲンノショウコ

牧 幸 男

薬用植物と言えばゲンノショウコをあげる人が多い。この植物は、下痢止めの妙薬として日本で一番膾炙され、今日でも利用する人が多いからであろう。我が国で有名な薬用植物だが「漢方」(中医)の本場中国では全く使われていない。わが国独自で発達した「和方」のひとつで、民間伝承の薬用植物である。恐らく、人間の病の中で胃や腸の病気が多いことと、ゲンノショウコは日当たりの良い道端でも畑の周りでも一寸した空き地に生える草で、欲しければ容易く入手できるからであろう。このゲンノショウコはドクダミ、センブリと共に、日本では古くからの三大民間薬の一つに数えられている。

「土用だからゲンノショウコを採っておこう。」このような言葉を耳にしたことがあるかもしれない。土用とは、五行説に基づく言葉で、方位の中央を示している。四季の終わりの18日間には土気を生じ、土がものを変化させると言う意味で、「土旺用事」を略して「土用」と呼ぶようになった。年に四回ある土用のうち、夏の土用だけが生活に溶け込んでいるのは、五行の相生関係によるものである。例年夏の土用は立秋から一八日前に始まり、立秋の前日が土用明けである。一年で一番気温の高い頃で、「土気盛んな時」である。

また、ゲンノショウコと葉の形が良く似ている早春の植物のイチリンソウやニンソウは既に地上部は枯れており、更に葉の形が似ている有毒植物のトリカブトは丈が高くなり区別できるので、この時期の採取は最もふさわしいからである。



ゲンノショウコ



イチリンソウの葉



ニンソウ



トリカブト

薬用植物の利用部位は採取時期が大体決まっている。ゲンノショウコを土用に採取する理由は、この時期ゲンノショウコに含まれる成分のタンニン量が一番多くなるからだ。また、気温も高く植物を乾燥させやすく、採取後の保存に最適でもある。先人は、後世の私達に経験から生まれた採取時期を、言葉として残してくれたのである。

ゲンノショウコは、日本各地の野原や山、道端などの日当たりの良い所に、ごく普通に自生するフクロソウ科の多年草である。春根生葉が芽生え、成長するに従い茎は地面を這うようにして増殖する。一株の大きさは一年草は20cm程であるが、3年草は60cm以上に成長し、葉柄のある葉を対生する。葉及び茎には毛がある。夏、枝先や葉間に花柄を出し2~3個の梅に似た花をつける。花の色は地域により白色、紅紫色、淡紅色で5弁の可愛いらしい花である。花が終わると長くちばし状の蒴果を結び、熟すると裂開して、各々1個の種子をもつ五つの穀片はその柄が軸を離れ、ただくちばしの先に付着し、しかも外側へ巻いて種子を飛ばす。



ゲンノショウコの種子

ゲンノショウコはタチマチグサ（すぐ効能が分かる。）とも呼ばれ、日本では良く薬用に使われていた。一番古い記録は采女輔仁編纂『本草和名』(918)に「大知たち未知まぢくさ久佐の記録があるが、薬用に利用するようになるのは江戸時になってからである。貝原益軒著『大和本草』(1709)の雑草類の「牛扁」の項にレンゲ草と伝山野近道處々ニ多ク繁生ス「藻鹽草」ニタチマチ草ト訓ス。



シロバナ



アカバナ

又俗ニゲンノセウコト伝。葉ハ毛茛及キジン草ニ似テ花ノ形ハ梅花ノ如シ。六、七月ニ紅紫花ヲ開ク。葉莖トモニ陰干ニシテ末と為シ、湯ニテ服ス。能ク痢ヲ治ス。赤痢ニ尤モ可也。又煎湯ト為シ、或ハ細末シテ丸ス、皆驗アリ。本草ニハ此功能ヲノセズ。本草毒草類ニノセタリ。然レドモ毒無シト曰フ。一度栽レバ繁茂シ、除キ難シ」とあるのが初見である。その後の記録では松岡玄達（恕庵）著『用藥歌』の続編(1726)で「牛扁……此ノ物、味曾汁ニテ食へ、痢ヲ治スルコト妙ナリ。故ニ俗ニ現ノ証拠ト名ク」と述べている。なお『本草綱目啓蒙』(1803)の「牛扁」の項に伶人草とあり「古ヨリ牛扁ヲゲンノシャウコニ充ツルハ非ナリ。……」との訂正もあった。この経緯からゲンノショウコの利用は、江戸時代初期頃からに普及が進んだようである。

薬用植物としての利用では比較的新しいためか、歌題に登場するのは、植物の利用が盛となる明治以降となる。

## げんのしょうこ 二十株ばかり 植えたらば 吾が一年は 飲みたりぬべし 土屋文明

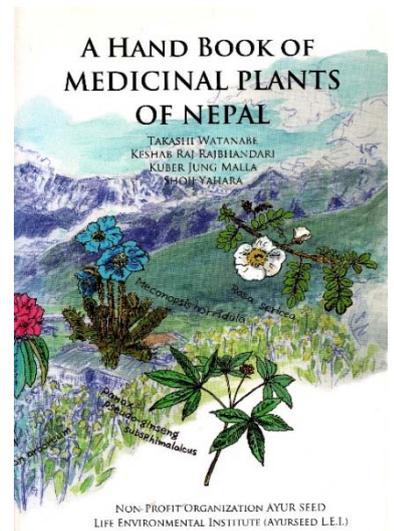
### うちかがみ げんのしょうこの 花を見る 高浜虚子

名前の由来は「現の証拠」とも書くように、その効果が確実に現れるからである。別名には薬効から生まれたものと、植物の形態から生まれたものがある。前者はたちまちくさ 忽草、赤痢草、持病草、痢病草、医者いらず、てきめん草などがある。後者は葉の形からネコ猫足草、果実の姿からみこしくさ 御輿草、槍草、老鶴草、花の姿から蔓梅草等がある。この中でミコシグサの名は果実が開裂した状態が神輿屋根に似ているからである。漢名について牧野富太郎博士は「牛扁、ぼうぎゅうしなえ 牻牛兒苗というのは誤った用法で、これはキクバフウロウを示し、日本には自生しない。」と述べている。また、中国名はどうしろかんそう 童氏老鶴草、わが国の生薬市場では「玄草」の生薬名で流通している。

学名は *Geranium neapense* で、属名は こうのとり 鶴のくちばしの意で果実の形が嘴に似ているから、種小名なネパール示しネパールに産する意味となる。ネパールの種小名の付く植物は少ないので、ネパールを訪れた時、書店で“A HAND BOOK OF MEDICINAL PLANTS OF NEPAL”を求めた。ここには Nepali name : Chunetro ghans、Englishname : Nepali gera、Other name : Nepal Genno-shyouko (Japanese)の記述があり、薬効は強壮と利尿の効能が示されている。

わが国の薬用植物のため生薬名はない。日本薬局方には茎・葉をゲンノショウコ、その粉末をゲンノショウコ末という名で収載されている。優れた健胃・整腸作用があり、下痢、便秘、食あたり、慢性の胃腸疾患に利用するが、十分煎じることで薬効成分が抽出される。その他に冷えた煎液は便秘に扁桃炎、口内炎、のどの痛みには、煎じ汁をうがい薬として使用している。残念なことにわが国独特の生薬でありながら、使用量の国内生産は限られ、殆どが中国からの輸入品に頼っていることである。

花言葉は「心強さ」である。



生薬問屋に搬入された佐久産の現証拠



繁茂する現証拠  
(三年生で1株の直径80cm)